
香水は硝煙の香り。

蒼空の獵団

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

香水は硝煙の香り。

【Nコード】

N7613R

【作者名】

蒼空の猟団

【あらすじ】

ダルい仕事をしながら、部下をいじめてみた。
そんなはなし。

「やめてくれっ！」

男は迷わず引き金を引いた。

パンッ

乾いた炸裂音と共に、血や脳みそや骨片が飛び散る。

「全く。なんで俺がこんな事を。諜報部の仕事だろう。」

男は諦めの混じった声音で愚痴った。

男は、天風龍屠。漆黒の髪と瞳。身長は175cm。必要な所に必要なだけの筋肉がついた効率的な体つき。雰囲気はダルそうだが、その瞳には狩人の光が宿っていた。

龍屠はプレハブ小屋から出る。プレハブのそとは森林。そこには、女が独り立っていた。髪は焦茶で瞳は朱い。服はぱっと見はただの野戦服だが、袖口や首から黒いスーツが見える。

「カノン。場所がわかった。潰しに行くぞ。」

カノンと呼ばれた女は、はい。と短く答え歩き出した。

森林を歩きながら、龍屠は問う。

「お前からは、いつも硝煙の匂いがするな。」

カノンは見向きもせず応える。

「あなたからも十分硝煙の香りがいたしますが？それに私は3歳か

ら銃を握っていますから。」
龍屠が苦笑いを返す。

「最初に握ったのは、確か、ルガーMK―？だったか？22LRなら子供でもガンガン撃てるな。」

カノンは良く覚えていますね。といいサクサク歩いて行ってしまふ。

「お前の事は大体把握してる。大切な部下だしな。」
龍屠がそう言うと、カノンが振り返った。

「では、何故私がこの会社に入ったかご存知ですか？」
冷めた目で言い放つと、また歩き出した。龍屠はそんな様子に、苦笑いしつつ応える。

「2つあるだろ？」
カノンがピクリと反応する。

「誰かさんの両親の敵討ちと…」
「それ以上いったら、射殺します。」
カノンの過激な対応につい、声を出して笑ってしまった。

「すまん。こんな事も知ってるぞ？その硝煙の匂いは、お前の敵の男が使っていた銃の火薬の香りだろう？」
カノンが立ち止まった。俯いてぼそぼそと言う。

「だったら、どうだというんですか…？」
龍屠は懷から小瓶を取り出した。

「そいつは、3年くらい前に俺が殺した。」
カノンが振り返る。

「だから、その硝煙の香りの代わりに、お前の両親の火薬の香りをやるよ。」

龍屠はカノンに小瓶を投げる。カノンは危なげもなく片手で受け取って、匂いを嗅いだ。

「っ！！何故？」

驚いたようだ。

「ひと月一緒にいれば、相手の事が大体分かるのが俺の自慢だ。お前の五感が普通よりかなり鋭い事だな。」

カノンは無言で歩き出した。龍屠も何も言わず歩き出した。

「社長。」

「んー？」

「これは有り難く戴いておきます。」

二人はまた黙って歩き続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7613r/>

香水は硝煙の香り。

2011年5月16日23時06分発行